「安藤先生」

―二稿―

2025/6/25

〈人物表〉

山内（やまうち） 芽衣（めい）	（17）	丸バツ高校三年一組の生徒
中村（なかむら） 真帆（まほ）	（17）	芽衣のクラスメート
安藤（あんどう） 邦康（くにやす）	（27）	丸バツ高校の数学教師
木村（きむら） 浩介（こうすけ）	（34）	芽衣のクラスの担任

1.

丸バツ高校校舎・廊下（昼）

コツコツという黒板の筆記音。

2.

丸バツ高校校舎・三年一組教室（昼）

授業中の教室。

安藤邦康（２７）、黒板に自分の名前を書いている。

右側頭部に、髪が大きく外にハネて寝癖のようになっている部分がある。

山内芽衣（１７）、その様子を見て呆気に取られる。

安藤、生徒の方を振り向き、眉一つ動かさず、

安藤　「あんどう、くにやすと言います」

×　×　×

チャイムの音。ぼーっとしていた芽衣、ハッとする。

安藤　「三角関数出ない大学なんてありませんからね。不安な人は二年の範囲から復習必要ですよ」

と、教室を出る。

芽衣のノートには、安藤の似顔絵と、大きな余白。

芽衣、髪のハネ部分をぐりぐりとシャーペンで囲む。

中村真帆（１７）、その様子を後ろから覗き込んで、

真帆　「……あれはさ、ああいう髪型なの？」

芽衣、ぐりぐりと囲む手を止める。

3.

芽衣の家・外観（夜）

二階建てのこぢんまりとした一軒家。

窓に明かりが灯っている。

4.

芽衣の家・芽衣の部屋（夜）

芽衣、勉強机に向かって数学の教科書とにらめっこ。

ノートに目を移し、一枚捲ると、安藤の似顔絵。

机の上のキッチンタイマーが鳴る。

芽衣、天を仰いで、ため息をひとつ。

5.

丸バツ高校校舎・三年一組教室（昼）

チャイムの音。

安藤、教卓の上の荷物をまとめている。
芽衣、教科書片手に恐る恐る歩み寄って、

芽衣「あの」
安藤「はい」
芽衣「さっきのところなんですけど」
と、教卓に教科書を開いて見せて、
安藤「これはまず加法定理を使って……」
説明する安藤、髪がハネている。
安藤「……で、あとはこの式を積分するだけです」
芽衣「先生」
安藤「はい」
と、芽衣をじっと見る。
芽衣、安藤の視線に思わず戸惑って、
芽衣「……」
安藤「何ですか？」
芽衣「なんていうか……」
安藤「はい」
芽衣「なんか、いつもと違いません？」
安藤「いつもと？」
芽衣「はい」
安藤「いつもというのは、いつですか？」
芽衣「え？」
安藤「昨日と比べてという意味ですか？」
芽衣「いや、昨日とは、一緒なんですけど」
と、チラッと安藤の髪を見る。
安藤「先週と比べてですか？」
芽衣「それも、一緒だと思います」
安藤「じゃあ、どうして赴任してきたばかりの私の、いつもを知ってるんですか？」
芽衣「……それは、なんといいますか」
安藤「別に、いつも通りですよ」
芽衣「先生、一回鏡とか見たら……」
芽衣の手にはポケットから出したコンパクトミラー。
安藤「山内さん」

芽衣　「はい」
安藤　「この問題、授業でも説明しましたよね」
　　と、教科書の問題を指す。
安藤　「聞いてました？」
芽衣　「えっと、その」
安藤　「ちゃんと集中しないと、時間の無駄ですよ」
　　と、芽衣に教科書を返す。
　　その頭、髪がハネている。

安藤　「山内さん」
芽衣　「……はい？」
安藤　「山内さんは、個性的な人ですね」
芽衣　「……ありがとうございます」
　　と、コンパクトミラーを持って立ち尽くす。
　　安藤、立ち去る。
　　芽衣、席に座る真帆に向かって地団駄。

6.　丸バツ高校校舎・階段踊り場（昼）

　　踊り場の壁には大きな鏡。
　　芽衣、真帆の姿が映っている。
　　芽衣、安藤が階段を登ってくるのを見計らって、
芽衣　「（白々しく大声で）なんか、この鏡には、たまに自分の死に際の表情が映るらしいよー」
真帆　「えー、こわーい。うわー、ほんとだー」
　　安藤、二人の前を素通り。
芽衣　「……」

7.　丸バツ高校校舎・廊下（昼）

　　安藤、廊下をスタスタと進む。
　　芽衣と真帆、その後ろにピタリと付けて歩いていて、
芽衣　「あ、先生。頭に虫が」
　　と、安藤の頭を指差す。
　　安藤、立ち止まって芽衣を見る。
芽衣　「多分蜂です。ほらここ……」
　　と、安藤にコンパクトミラーを差し出す。

安藤、鏡には目もくれず、犬のようにぶんぶん頭を振るわす。

安藤　「……取れましたか？」

芽衣　「……はい」

8.　丸バツ高校校舎・職員室（昼）

芽衣の担任・木村浩介（３４）の机の前。

木村　「そんなこと言われてもなあ」

芽衣　「だっておかしいじゃないですか？　どうして生徒だけ身だしなみ検査あるんですか？」

木村　「先生は大人だから自分でやるんだよ」

芽衣　「大人だからこそです」

芽衣、職員室内を見回して、

芽衣　「言われないと、分からない人も、いると思うので」

周囲の教師数名、芽衣の言葉に軽く驚く。

木村の向かいの机の安藤、淡々とＰＣを叩いている。

木村　「お前、誰のこと言ってんだ」

芽衣　「（取り繕って）とにかく、みんなで身だしなみに気をつけたらもっと快適じゃんってことなんです」

木村　「そうかなあ」

と、卓上の鏡で自分をくまなく見る。

芽衣　「……先生じゃありません」

木村　「え？」

と、まんざらでもなさそう。

芽衣、安藤をチラッと見て、

芽衣　「……」

9.　丸バツ高校校舎・屋上（昼）

フェンスで囲われた屋上に、ベンチがいくつか。

真帆、その一つに座って弁当を食べている。

芽衣、真帆の隣で頭を抱えている。

真帆　「じゃあ、ああいう髪型なんだよ」

芽衣　「そっちの方が困るんだけど」

真帆　「そんなに気になる？」

芽衣　「別に、ずーっと気になってるわけじゃないよ？　頑張って聞こうとしてるよ？」
真帆　「うん」
芽衣　「ただこう、ふとした時に、この人はなんでこんな頭で平気で授業してるんだろうって、沼にハマっちゃって」
真帆　「沼？」
芽衣　「……もう数学ダメかもしれない。私立にするかも」
真帆　「そこまで？」
芽衣　「うん」
真帆　「直接言ったらいいんじゃないの？」
芽衣　「無理だって」
真帆　「……私、言ってあげようか？」

10.

丸バツ高校校舎・廊下（昼）

真帆、安藤と二人で立ち止まって話している。
芽衣、その様子を影から盗み見ている。
真帆と安藤、何やら楽しげな様子。
安藤、声を出して笑い出す。芽衣、驚く。
真帆、安藤の髪のハネ部分を指差す。
安藤、ハネ部分を軽く触る。笑顔。
芽衣、その様子をまじまじと見る。

11.

書店・雑誌コーナー（夕方）

真帆、男性向けファッション誌を開いている。
誌面には、くせ毛風スタイルの男性モデル。
芽衣、覗き込んでいて、
芽衣　「……いや、だいぶ違くない？」
真帆　「でも、これのつもりなんだって」
芽衣　「そう、なんだ」
真帆　「うん」
芽衣　「それで？」
真帆　「あ、そうなんですねーって。ちょっと、あんまりにも気に入ってそうだったから」
芽衣　「そっか」

真帆　「多分、私、安藤先生の中で、髪型褒めてくれた人になってると思うわ」
芽衣　「逆効果じゃん」
真帆　「ごめん」
芽衣　「ううん」
　　真帆、雑誌を棚に戻して、
真帆　「……参考書でも見て帰る？」
芽衣　「うん。三角関数、買わなきゃ」

（おわり）